〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL. 0261-22-0211 Fax. 0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com
市立大町山岳博物館公式 Web サイトは、
大町山岳博物館友の会の支援により博物館が運用しています。

OMACHI ALPINE MUSEUM
市立 大町山岳博物館

山と博物館

「山と博物館」は、大町市役所および市内社会教育施設で、設置・配布しているほか、博物館公式 Web サイトからもご覧いただけます。

2月号

第61巻 第1号
2016年

無料
Free

もくじ

今月の1枚 …… 1ページ
・「ライチョウ会議　長野大会」の開催が決定しました！
さんぱく研究最前線 …… 2～3ページ
・「山の恵み　北安曇地域の温泉 －江戸時代・温泉文化のはじまり－」
・スバールバルライチョウの飼育《前編》
博物館のひろば …… 4ページ
・大町北高等学校の職業体験学習　・展示室一斉清掃・メンテナンス
・氷見市・島田市・大町市スポーツ少年団姉妹都市交流会による博物館見学
・大町西小学校4年生の社会科連携授業
イベントのお知らせ …… 4ページ
・企画展「北アルプス山麓の自然に蝶が舞う」

博物館施設案内はこちら

県知事とライチョウ会議議長と市長の面談

「ライチョウ会議　長野大会」の開催が決定しました！

鳥羽　章人

昨年12月8日、長野県庁の知事室において、阿部県知事、中村ライチョウ会議議長、牛越大町市長が本年10月15日・16日の両日にわたり大町市で開催される平成28年度ライチョウ会議長野大会について、関係者らとともに面談を行いました。面談の席上、阿部知事に対し中村議長と大町市長より大会の大町市開催に向けて、長野県からの力強い協力を要請させていただいたところ、阿部知事からご快諾いただくと共に、協力開催に向けての具体的な対応策の検討を県環境部へ指示する旨の発言がいただけました。

大町山岳博物館としては、県の協力に対し感謝を申し上げるとともに、有意義な大会となるよう関係者と共に長野県と大町市、ライチョウ会議が中心となった実行委員会を早急に組織し準備を進めることとなりますので、関係の皆様方からの格別なご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

ライチョウ会議大会は、本年の長野大会で17回目を数え、大町市での開催は4回目となります。

昨年は静岡で開催されていますが、年々開催規模が拡大しており、ライチョウ保護・保全に対する関心の高まりが強く感じられるところであります。

本年の大会は、従前のライチョウの研究発表や教育普及と併せて、行政機関等の横断的な連携による対策も視野にいれ実効性のある大会を目指しております。

加えて、ライチョウ会議大会は大町市・大町山岳博物館が発祥の地でありますので、大会当日は、山岳文化都市の大町市がライチョウで盛り上がるよう、大勢の皆様にお越しいただければと願っております。　（市立大町山岳博物館　館長）

さんぱく研究最前線 ー北アルプスの自然と人　トピックスー

「山の恵み　北安曇地域の温泉
ー江戸時代・温泉文化のはじまりー」

清水　隆寿

はじめに

日本では、断層や破砕帯など温泉を湧出する地質的な特徴を反映し、世界で最も温泉の数が多い国として知られています。国内源泉の総数は２万８千以上にのぼり、宿泊施設を伴う温泉地は３千５百ヶ所以上と、日本に次いで温泉地が多いイタリアの３百ヶ所と比較しても、いかに温泉が多いかがわかります。国内の温泉利用の歴史は奈良時代の『風土記』や『日本書紀』にすでに散見され、以降私たちはその自然の恵みを享受し、温泉という文化を育んできました。

雄大な北アルプスに抱かれた北安曇地域にも、江戸時代の風情漂う湯治場から、現代の地域活性を図った観光拠点として新たに掘り出された温泉地まで数多くの温泉地があり、地域の風土を醸し出してきました。小稿では、この北安曇の地で暮らした先人が生み出した江戸時代以前の温泉の歴史をご紹介致します。

北安曇地域の温泉文化のはじまり

北安曇地域で最も古い温泉の記録が残っているのは小谷温泉です。この温泉は、戦国時代の弘治２年（1556）、平倉城での合戦の際に飯森十郎の家臣が田和薬師の霊験を得て温泉を発見したとか、「武田信玄の隠し湯」であったとの伝承が残る温泉ですが、記録の上では、享保年間（1716-1735）に松本藩により編纂された『新府統記』に温泉があったことが知られています。寛永２年（1790）の「入湯銭請取帳」他の史料によると、近在の住民に留まらず糸魚川方面から湯峠を越え、１週間から10日間程、米を持参の湯治客が、夏場の農閑期や休漁期を利用し、藩を越えた他地域から千名余り利用していたことがわかります。大正中頃には全国に名湯として知れわたり、バスの運行もないこの時期に3万人余りの湯治客が訪れるまでになります。深田久弥など文人墨客に愛された山田旅館は、３階建ての木造で江戸時代の名残りをとどめ現在国の登録文化財となっています。また、同じ中谷地区には「松葉の湯」が古くより知られ、明治時代には湯屋が作られていました。なお、小谷地域とかかわりの深い糸魚川には、天保年間（1830-1843）に開発されたという蒲原温泉、雪倉銀山の開発とともに知られるようになる蓮華温泉が同時期浴場を設けています。蓮華温泉には、明治27年、W.ウエストンが白馬岳を目指す途中に宿泊しています。

大町市では、江戸時代以前には葛温泉と湯俣温泉が知られています。葛温泉は大町市街から10kmほどの距離を隔てた高瀬川沿いの標高880mの景勝地にあり、後に後立山連峰への登山拠点としても盛んに利用されています。この温泉の開湯は野口・西沢家文書によると、江戸時代安永年間（1772-1780）には湯屋が建てられ、開湯されたことがわかります。葛温泉へ向かう道はかって「湯道」と呼ばれ、現在ではその大半が大町ダム建設により水没し、かつての情景を目の当たりにすることは出来ませんが、幸い大町エネルギー博物館の敷地内に当時湯道沿道に置かれた石仏や丁石が保存されています。

葛温泉から高瀬川をさらに20kmほど遡った標高1530mの山小屋・晴嵐荘付近から上流１kmの間の湯俣川河岸には、熱湯が噴出し、荒涼とした一帯は「地獄」と呼ばれる地名を今に伝え、大正11年に国指定天然記念物に指定された噴湯丘がある地域として知られています。この温泉については豊田利忠による『善光寺道名所図会』（嘉永２年・1849）に、大量の湯とともに球状の霰石（あられいし）（球状石灰岩）が一面に噴出している様子を書きとめています。

明治９年「美麻村地誌取調上申書」によると、旧美麻村内には６ヶ所の冷泉が記載されていますが、このうち江戸時代に舎屋を建て温泉地として利用されていたのは、「小岩嶽之冷泉」と記された１ヶ所だけではないかと推測されます。上申書には「其質硫黄明礬（みょうばん）の気あり、腫物（はれもの）及び病に適す。浴場一ヶ所、（中略）一歳浴客凡三百人、弘化四年（1847）より発見す。」とあり、青具地区近隣の人々の癒（いや）しの地となっていたと思われます。昭和40年代になってこの冷泉を利用し「小岩岳温泉保養センター」が建設されました。また日影・川下地区にあった「傴僂（クグリ）之冷泉」も古くから知られていた冷泉でした。昭和63年にはこの温泉を利用して「もくじき荘」が営業されることになります。

松川村の南隣旧穂高町には、坂上田村麻呂の開湯伝説を伝える中房温泉が江戸時代以前の開湯として知られています。前述の『新府統記』には「中房山の奥に湯あり、入浴するものあり」と記されていますが、湯小屋を設けて営業を始めたのは、文政４年（1821）、百瀬秀八郎が明礬（みょうばん）採集のため同地を訪れた以降となります。

江戸時代中頃になると温泉療法に関する著書やガイドブックが出回るようになり、庶民にいたるまで温泉を楽しむ時代になってきました。

（市立大町山岳博物館　副館長）

つぎの方は、年間を通じて博物館の観覧料が無料です。
・大町市内在住の 65 歳以上の方
・大町市内の小学校・中学校に通う児童・生徒の方
（入場の際、受付にてお名前等をご記入ください）

スバールバルライチョウの飼育《前編》

佐藤　真

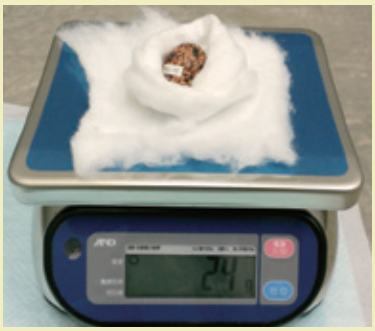
◇はじめに

平成27（2015）年の６月から始まったスバールバルライチョウの飼育について、今年初めてスバールバルライチョウの飼育に取り組んだ学芸員の佐藤からと、昭和50（1975）年よりニホンライチョウの飼育に携わっている前館長・現指導員の宮野からの２つの視点で前編・後編にわたってご説明させていただきます。

当館では６月25日に富山市ファミリーパークから成鳥のオス３羽と卵15個、いしかわ動物園から卵12個を借受・譲受しました。卵は7月17日から18日にかけて計6羽が孵化し、現在では４羽が若鳥まで成長しています。どの動物の飼育でもそうですが、大人になるまでの死亡率が高くなっているので、ここでは卵から雛までの飼育に焦点を当てたいと思います。

◇孵化までの怖さ

私たちの取り組みは2園からいただいた卵を温めるところからスタートしました。温める際の温度や湿度は孵卵器が精巧なため、適正な値に保つのは難しくありません。しかし、卵を孵化させるためには転卵という作業が必要になります。転卵には胚（卵黄）を正しい位置に戻すなどの効果があるとされているため、孵化に必須の作業となりますが、機械では同じ方向にしか転卵してくれません。ですので、一定時間ごとに卵を“人の手で”違う方向に回転させてあげる必要がありました。これは非常に精神がすり減る作業で、落としたら…と考えると、手が震えてしまいましたが、幸いにも落とすこともなく、無事に孵化してくれました。



27個の卵から孵化したのが６羽だけ、というのは失敗のように思えるかもしれませんが、飼育下での受精卵の割合平均が約30%、孵化率が約50%ですので、成功と言えます。

◇育雛の大変さ

孵化から12時間後には小松菜やスイバ、ギシギシを啄む姿が確認されました。また、６日後には青物と粉砕したペレットの配合飼料も食べ始めました。写真は５日齢（６日目）雛の採餌行動です。

このころから元気よく食べては寝て、食べては寝てを繰り返しながら体重を増やしていました。個体を識別するために足にはそれぞれ異なる色を着けました。

孵化して１週間は宮野指導員と交代で朝の５時頃から夜の10時頃まで餌の給餌や経過観察を行っていました。そのような育雛期間でなにより驚いたことは、成長の早さです。私が休日などで２日離れている間にも、餌を食べる量や行動の変化、そして特に大きさや見た目が大きく変化しているので驚きました。

【写真・左：11日齢、右13日齢。】

なんて成長の早い鳥だろう、と考えていましたが、系統的に原始的なライチョウなどのキジ目では早成性という特徴をもつ傾向があります。早成性とは、生まれた時には綿羽があり、すぐに開眼し、巣から離れて、餌を自ら採るという傾向にある鳥のことで、移動にもエネルギーを消費してしまうので、孵化後の成長速度は親からの給餌を受ける晩成性の鳥よりも遅いとされています。晩成性の鳥を飼育したことがないので、なんとも言えませんが、自分で餌を食べてくれる分、育雛は少し気が楽なのだろう、と思うことにしています。

◇不思議発見

雛の時期には体重測定や足についた糞を取り除く作業があったため、毎日保定（捕獲）していました。そこで気付いたことは雛にも肉冠のようなものがあるということです。

肉冠は雌雄どちらも有しており、繁殖期のオスの肉冠は非常に目立つことが有名です。写真の個体は18日齢のメスですが、肉冠のようなものが確認できます。肉冠はオスがメスを獲得するための重要な形質の一つと考えられていますが、それがメスも有している適応的な意義は明らかになっていません。このようにライチョウに関して分かっていることは多いとは言えず、生息域内や生息域外の研究者、関係機関による調査を通じて知見の集積を継続する必要があります。

◇経験を活かす

まだスバールバルライチョウの飼育を経験して８ヶ月ですが、この経験は、今後のニホンライチョウを飼育する上で非常に有意義なものになったと思います。

飼育経験だけでなく、研究をする上での重要なアイディアという点でも、多くのことに興味をもつことができました。

今後、スバールバルライチョウを用いた飼育技術の向上や基礎研究、さらに、山岳における調査研究などを通してニホンライチョウや高山環境の保全に寄与していきます。（市立大町山岳博物館　学芸員）

博物館のひろば

つぎの方は、年間を通じて博物館の観覧料が無料です。
・大町市内在住の 65 歳以上の方
・大町市内の小学校・中学校に通う児童・生徒の方
（入場の際、受付にてお名前等をご記入ください）

大町北高等学校の職業体験学習

平成27年12月８日（火）・９日（水）実施

長野県大町北高等学校１年生２人が当館で２日間の職業体験学習を行いました。

当館では、学校教育におけるキャリア教育推進に協力しており、年間を通じて随時、市内や近隣町村の中学生や高校生の職業体験学習を受け入れて実施しています。当館で体験していただく仕事内容は付属園での動物飼育管理業務です。

動物飼育員の指導のもと、餌の調理・給餌、飼育舎の清掃、園内の整備という通常業務をひと通り体験していただきました。写真のように動物への給餌作業にも真剣に取り組んでいただきました。当館での経験が今後の進路の参考になれば幸いです。

展示室一斉清掃・メンテナンス

平成27年12月21日（月）実施

毎年年末に行っている展示室内の清掃とメンテナンスを本年度も実施しました。毎朝の清掃では落としきれない汚れを綺麗にすることができたと思います。

学芸員の主な職務として、調査・研究、展示・教育普及、そして資料の収集・保管の３つが挙げられます。今回の清掃は、保管している資料の状態を確認し、効果的な展示の在り方について改めて思いを巡らせる非常に重要な博物館業務の1つです。

少し綺麗になった展示をご覧いただき、その際にはぜひ、１つでも印象に残った内容を覚えて、そこから世界を広げていただければと思います。

氷見市・島田市・大町市スポーツ少年団姉妹都市交流会による博物館見学

平成28年１月11日（月・祝）実施

姉妹都市である氷見市・島田市（氷見市の姉妹都市）・大町市のスポーツ少年団同士が交流を深め、スポーツ少年団のさらなる発展を目的とした交流会を毎年開催しています。

３日にわたる交流会の最終日、山岳博物館に129人が来館し、北アルプスの文化や歴史、成り立ちやそこに生きる動植物について学んでいただきました。

普段見ることのできない展示物に非常に興味をもって見学していただけました。この機会が少しでも交流につながり、今後の学習の助けになるよう、博物館としても日々努めて行きたいと思います。

大町西小学校４年生の社会科連携授業

平成28年１月15日（金）実施

大町市立大町西小学校４年生（２クラス50人）が、「郷土に伝わる願い」という単元の社会科授業で山岳博物館を訪れました。この単元は、地域の発展に尽くした先人の具体的事例を学ぶもので、北アルプスに山小屋を建て、日本初となる近代登山の案内人組合をつくり、近代登山発展に貢献した百瀬慎太郎を学習素材として取りあげます。当館では、関係する常設展示コーナーを利用しながら学芸員が説明を行いました。近年、こうした学校との連携授業を市内の小学生対象に取り組んでいます。当館の資料や職員を学校の授業で活用していただき、より身近な博物館をめざしています。

イベントのお知らせ

平成27年度 市立大町山岳博物館・信州大学山岳科学研究所 連携企画展
山岳を科学するシリーズ③
「北アルプス山麓の自然に蝶が舞う」

長野県に生息するチョウ類は、約150種と言われ、都道府県別でみても多い数とされています。信州の自然はなぜこれほどまでに豊かなチョウ類を育むのでしょうか。私たちの暮らす北アルプスを含む山麓地域でもチョウは豊かに育まれているのでしょうか。本展では、チョウの眼をとおして、信州の自然にせまります。

平成28年
２月13日（土）～４月10日（日）
【会期中の休館日】２月15日・22日・29日・３月７日・14日・22日・28日・４月４日

イベント

■講演会「北アルプス山麓の自然に蝶が舞う」
平成28年２月13日（土）
午前10時30分～正午
場　所：山岳博物館　講堂
講　師：江田　慧子　氏
参加費：無　料

■ 企画展ギャラリートーク
平成28年３月20日（日）
１回目：午前10時30分～
２回目：午後２時～（各40分）
場　所：山岳博物館 特別展示室
参加費：入館料が必要となります。
（※「家庭の日」につき、大町市民の方は当日無料で入館できます。）

編集・発行
市立大町山岳博物館 OMACHI ALPINE MUSEUM
— 創立 1951 年 —

〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
市立大町山岳博物館　編集責任者　鳥羽章人
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.omachi-sanpaku.com

２月号
第 61 巻 第１号
2016 年

発行日　2016（平成 28）年１月 25 日

印　刷　有限会社北辰印刷
〒398-0002 長野県大町市大町 3871-1
TEL.0261-22-3030 FAX.0261-23-2010